

「花まる学習会」高濱正伸さん、平沼純さんに聞いた

子どもを本好きにするには どうしたらいい？

テレビやゲームにばかり夢中のわが子を「なんとか本好きにしたい！」と思っているママも多いはず。花まる学習会の高濱正伸さんと平沼純さんに、子どもを本好きにする秘訣やオススメの本を教えていただきました。

取材・文／山下 隆・片山幸子(エディワン) 撮影／亀和田良弘(本誌)
イラスト／鈴木勇介 デザイン／tabby design

教えてくれたのは…



高濱正伸さん

『数理的思考力』『国語力』『野外体験』を重視した学習教室「花まる学習会」代表。関東、大阪、名古屋などで教室を開設。算数オリンピック委員会理事。



平沼 純さん

慶應義塾大学院社会学研究科修士課程修了。2012年より花まるグループ入社。高濱さんとの共著『子どもを本好きにする10の秘訣』(実務教育出版)がある。



お父さんやお母さんは
どのくらい読書している?

『「うちの子は、全然本を読まないんです』という相談をご家庭から受けことがあります。しかし

将来の学力向上にもつながる
言葉を大切にする環境づくりが

少し厳しい言い方をすると、お父さん、お母さんは毎日どのくらい本を読んでいますか？そもそも読書習慣がない家庭で、子どもだけに本を読むことを強要してもけつして身につきません』

そう指摘するのは、小学生を対象とした学習教室を開設する「花まる学習会」グループ代表の高濱正伸さんです。

花まる学習会は、野外体験や「将来メシが食える大人に育てる」ことを提唱するユニークな学習指導に定評があります。

本が好きになれないのは
大人に原因があるから

「そもそも生まれつき本嫌いな子はいません。『本を読まない』『本が嫌い』なのは、環境づくりなど大人たちに原因があるから」とは、同グループで国語の学習指導を行う平沼純さん。

「読書にかぎらず、言葉の環境がしっかりしている家庭は、子どもの中の学習能力も高いもの。正しい言葉、相手に伝わる話し方など、『言葉』を大切にすることが本好きへの第一歩といえます」(高濱さん)

子どもを読書嫌いにしないための環境づくりや、親ができること、読書で得られる効果などについて詳しく紹介していきましょう。



子どもの本好きにする 7つの秘訣

「子どもを本好きにしよう!」と力を入れすぎで「本を読みなさい」と強制しないこと。遠回りでも自然な環境づくりを心がけましょう。

まずは幼いころからの「読み聞かせ」が大事!

小学生になると文字がわかるので「自分で読みなさい」と言ってしまいがち。読み聞かせに年齢は関係ない。繰り返したくさん読み聞かせをしてあげることで本への興味は高まる。



読み聞かせのコツ

- 1 子どもが読みたい本を選ぶ**
親が読み聞かせたい本よりも、まずは、図鑑や絵本など子どもが興味のある本から。
- 2 リラックスした環境で読む**
きちんと座って読むのではなく、寝そべった状態でもOK。リラックスした環境で。
- 3 表現豊かに読む**
本にあまり興味がない男の子には「ドカン!」や「パキッ」など擬音で興味をひく。



「やらせたいこと」ではなく
やらせたいことの「喜び」を
伝えることが大切です



親自身が夢中になって本を読む姿を見せる

子どもは親の影響を多大に受けるもの。親がテレビやパソコンばかりで本を読まない環境では子どもは本に興味をもたない。テレビを消して、本を読む姿を普段から見せること。



読書によって得られる喜びを伝える

「字を覚えさせるため」とか「気持ちをやさしくさせるため」など、本を何かの「教具」にしない。本の世界にどっぷり浸り、楽しさを味わうこと自体を「目的」にする。



子どもを本好きにするには、大きく2つのことを心がけることです。ひとつは、先に紹介したような「環境づくり」です。「塾に面談に来た親子の話ですが、お母さんは待合室にいるあいだ、読書しているんです。子どももお母さんにつられるようにして本を開いて読んでいました。こういう家庭ならきっと『子どもが本を読まない』と悩むことはないなど感じましたね」(高濱さん)

本好きにするための7つの秘訣を上にまとめていますが、なかでも読み聞かせの大切さについて、平沼さんはこのように話します。「小学生までは、誰かの語る声によつてさまざまな情報を受け取る力が強い時期です。日本では子どもが小学校に上がって読み書きできようになると読み聞かせをぱつたりやめてしまう家庭が多いのですが、欧米では逆に、読み聞かせを3倍もふやすといわれます。読み聞かせは『何歳まで』という年齢制限はありません。文字が読めることと、物語の世界の楽しさを誰かと共有することは別ものなので、年齢は気にせず読み聞かせをしてあげれば、本への興味もどんどん高まるはずです」

読み聞かせは
小学生以降も続けて

最初は ゲーム攻略本でもOK

子どもは親から「ためになる本」を押しつけられるのを瞬間に見抜くもの。読書も出発点はあくまでも楽しさや興味。たとえゲーム攻略本でも、真剣に読む気持ちがスタートに。



ヒケツ
4

「読書ラリー」で 読書量を “見える化”する



ヒケツ
5

読書に興味が芽生えてきた子は、

ゲーム感覚で読書を楽しむ。読んだページ数に合わせて、色を塗っていく「花まる学習会」式の読書ラリーや、すごろくの駒を進めるなど親子で競争も。



思春期に入ったら 親の意見より “斜め上”の意見

「斜め上」とは、いとこのお兄さん・お姉さんなど。特に思春期には「教育」と直接関わりのある親や先生の意見より素直に聞き入れやすい。同年代のころに読んでいた本などをすすめてもらう。



図書館でお気に入りの一冊と出会ったら購入

子どもは興味がある本を見つけると、何度も繰り返し読むもの。図書館でそんな本に出会ったら、書店で購入してあげて。ムリに「違う本も読みなさい」とは言わないこと。



NGワード



- マンガばかり読んでないで本を読みなさい
- 最後まで読みなさい
- どういう内容が説明してみなさい
- 同じ本ばかり読んで！
- 本読まないと先生に怒られるよ！

いずれも親がつい言ってしまいがちなもののばかりだが、子どもの本への興味をそぐような言葉。勉強や道徳、教訓を押しつけるのではなく、子どもたちの好奇心や冒險心を刺激する声かけを。

今、読書が嫌いでも
きっとかけしだいで本好きに

「本を読むのが嫌い」という子に読書を強制しても逆効果になるだけ。特に思春期を迎えると親に強制されると反抗したくなるもの。そんなとき、私が提唱しているのが『斜め上』の関係です。私自身、親への反抗心があったときに、いとこのお兄さんから『戦争を知らない子どもたち』(北山修著)をすすめられて、夢中になつて読んだ記憶があります。(高濱さん)

たとえ今は本嫌いであっても、子どもは本来、好奇心が旺盛で、未知なるものへの憧れや、まだ見ぬ世界を見たいという冒險心にあふれているものです。

道徳や教訓を押しつけるのではなく、本を通じて子どものポテンシャルを引き出してあげることが大切なのです。

**好奇心や冒險心を
刺激するような声かけを**

本好きにするための親の心がけの2つ目が、「本嫌いにさせない」とです。

「生まれつき本嫌いな子などいません。もし本嫌いな子がいるとしても、本嫌いにさせてしまったような大人の声かけや行動に原因があるのです」(平沼さん)

上にいくつかのNGワードを紹介していますが、なかなか本を読もうとしない子に、ついこんな言葉をかけてしまったこともあるのではないか?

読書が育む7つの力

読書によって得られるのは、直接的な学習面での効果だけではありません。情動や将来生きていこうで必要ないくつもの力です！

読み方を自然に学ぶ

「教育者としてのこれまでの経験で『読書总量は学力に通じる』ことは断言できます」（高濱さん）
読書によって育まれる7つの力を下にまとめています。

「俗にいう『ウナギ文』というものがあります。たとえば家族でレストランに行き、注文を聞かれたとき『ボクはウナギ』と言ったりします。その場にいる人のあいだでは『ウナギを注文する』ことは通じます、ほかの人が状況を説明されずに聞くと『ボクの正体はウナギです』とも受け取れますよね（笑）。中学年くらいまでは、概してこんなコミュニケーションをとりがちな伝わる話し方が読書を通じて自然なわけです」（平沼さん）

高濱さんが先に述べた「言葉を大事にする環境」にも通じるところがあります。注意すべきは、読書を始めるきっかけが「読書感想文」にならないようにすること。

「本を読んだ感想や登場人物についてのみずから思いを他者に伝わるような言葉で言語化することは、とても重要なことです。しかし、本に慣れていないうちから読書感想文を書かされると本嫌いになることもあります」（高濱さん）

読書感想文が始まる前に本に慣

記憶力

ある程度の長さの物語を読み進めるには登場人物や物語の背景、出来事などを覚えて整理する必要がある。読書を通じて、こうしたあらゆる情報を記憶し整理する力が身につく。

集中力

子どもも読書に夢中になると、寝食を忘れて熱中することがある。そんな読書体験によって、ひとつのことに集中する力が自然と身につくようになる。

語彙・漢字

読書をしていると、学校では習っていない漢字と出会うことが多い。前後の文脈から漢字を理解したり、調べたり聞くことで、わからない漢字を知る機会がふえる。

感情のコントロール

物語で起こる出来事はいいことばかりではない。主人公が窮地に立たされたり、悲しい出来事が起こることもある。人生のシミュレーション体験によって感情をコントロールすることを学ぶ。

知識・知恵

インターネットで得られるような一問一答式の知識ではなく、本には長いを超えて受け継がれてきた先人の知恵や生き方の姿勢、メッセージなどがこめられている。

コミュニケーション力

小学3～4年生のころは自分と目の前の相手にしか伝わらない「話し言葉」が中心。読書を通じて、第三者にも伝わる「書き言葉」を習得しコミュニケーション力が大幅に伸びる。

想像力

物語を耳で聞いたり活字で読むことによって、その世界を自分なりに映像化してイメージできるように。特に幼いころからたくさん読み聞かせを受けてきた子どもは想像力にすぐれている。



れておくこと、そして「何が書いた?」「何が楽しかった?」

「何が印象に残った?」など、お母さんが聞いて書き取ることを練り返すことです。

「やがて『自分で書いてみたい』と子どもが言い出したら成功です」と子どもが書き残す習慣をつけ感じたことを書き残す習慣をつけられ、読書感想文への壁がひとつ取り除かれますし、何よりも読書によって得られる効果もより深まるのです」(高濱さん)

「子ども自身が楽しむ」

今回、平沼さんが推薦する本10冊をまとめて紹介しています。いずれも子どもの好奇心と冒險心をくすぐる本ばかりです。

「先にも述べたように、けつして

平沼純さんがすすめる 子どもが夢中になる本10 厳選



『ねえ、どれがいい?』

ジョン・バーニングム 作
まつかわまゆみ 訳 評論社

「ねえ、どれがいい?」と、子どもたちに出される質問の数々で構成された絵本。思わず笑ってしまう質問や「究極の質問」まで多彩。



『かずあそび ウラパン・オコサ』

谷川亮一著
童心社

1は「ウラパン」、2は「オコサ」など作者の造語である「ウラパン」と「オコサ」の組み合わせだけで、さまざまなものを教えていく。二進法の概念にも結びつく深い内容。



『よわいかみ つよいのかたち』

かこ・さとし 著・絵
童心社

一枚の紙の上にいくつの10円玉をのせられるかという実験など、家にある紙などを使って実際に試してみたくなる「かがくの本」。



『たべられる しょくぶつ』

森谷憲文 寺島龍一 絵
福音館書店

食卓に上る野菜やくだものがどうやってできるのかがわかる絵本。キャベツの種や落花生など、大人でも興味深く新鮮な驚きが。



『新幹線のたび~ はやぶさ・のぞみ・ さくらで日本縦断~』

コマヤスカン 著
講談社

新青森駅から鹿児島のおじいちゃんの家まで、3つの新幹線を乗り継いで日本を縦断するようすを俯瞰して描いた絵本。



『あくたれ ラルフ』

ジャック・ガントス 作
ニコール・ルーベル 絵
いしいももこ 訳
童話館出版

飼い猫のラルフは毎日「あくたれ」を繰り返しサーカスに置き去りに。絶望感と悲しみ、家族との再会、そして秀逸なオチが見どころ。



『ぼくらの地図旅行』

那須正幹 文 西村繁男 絵
福音館書店

5年生の男の子が地図と方位磁針で「地図旅行」。人々の暮らしの多様性にも気づかされ、子どもと一緒に地図を片手に旅に出たくなる。



『めっきらもっきら どおんどん』

長谷川摂子 作 ふりやなな 絵
福音館書店

神社のご神木に吸いまれ、そこにいたおばけの3人組と主人公のかんたは、さまざまな遊びをする。日本発の傑作ファンタジー。



『3びきの かわいいオオカミ』

ユージーン・トリビザス 文
ヘレン・オクセンバリー 絵
こだまともこ 訳 富山房

3びきのオオカミが大ブタに襲われる「3びきの子ブタ」のパロディー。破天荒なストーリーで、今はまだ読書嫌いな子にも向く。



『チムとゆうかんな せんちょうさん』

エドワード・アーディゾニー 作
せたていじ 訳 福音館書店

少年チムと船乗りたちの大冒險を描いたロングセラー絵本。徐々にひとり読みに移行する子にもうつてつけの一冊。